「おさしづ」語句の探求（42）

「おさしづ」第５巻における個人の身上・事情と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第５巻（明治33～34年）の「個人の身上・事情」における「道」の用例を整理する。第５巻には個人の身上・事情の「おさしづ」が148件ある。そのうち、「道」が用いられるのは106件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは50件である。

用例数としては、第４巻に引き続き、個人の身上・事情の「おさしづ」のなかで「道」が用いられる割合が多くなっている。これは「道」が多く用いられる「刻限」や「本席身上伺」の「おさしづ」が少なくなっていることと関連していると思われる。

どういう道か、道聞き分け

個人の身上・事情の「おさしづ」は、その脈絡はさまざまであるが、そこで説かれる「道」の諭しは似た内容のものが多い。いくつかにわけて整理する。まず、確認したいことは、「道」を聞き分けるようにと言われることである。

「この度身上にとんと障り付けたる。どういう道か、道聞き分け。……幾年通り、幾年通りてもどうもならん。しっかり改め変え。皆の中〳〵順序委せ置く〳〵〳〵。めん〳〵楽という。身から、どんと心定めにゃ定まらん。」（さ33・1・12　中津支教会長泉田の身上の処おさしづあり、それに付運び方なり又役員の治め方に付、喜多治郎吉出張する願）

「道」について、「幾年通りてもどうもならん」と言われ、「どういう道か、道聞き分け」と説かれる。このところから、「道」は、単に通るものというだけでなく、聞き分けるべきものであることが分かる。しかし、この「おさしづ」では、その内容について具体的には説かれていない。

天然の道

第５巻の「個人の身上・事情」をまとめて読むと、「天然の道」について頻繁に説かれていることに気づく。たとえば、次のようなものである。

「成程道は天然自然の理である。天然自然の理で治めるなら、どれだけ危ない所でも怖わい所でも、神が手を引いて連れて通る。天の綱を持って行くも同じ事。」（さ33・2・11　高知分教会長島村菊太郎部内巡教中、右の足怪我致せしに付願）

ここでは、天然自然ということが心に治まれば、天の綱を持って行くかのように、間違いなく通ることができる、と諭されている。その意味合いについて、次の「おさしづ」ではさらに詳しく説明されている。

「天然自然というは、誰がどうする、彼がこうしょうと言うても出来ん。独り成って来るは天然の理。金でどうしょう、悧巧でどうしょうというは、天然であろまい。世上から見て、珍しいなあ。何処から眺めても成程、というは、天然に成り立つ理。この理聞き分け。思案してみよ。それより明らかは無い。この道理皆伝え。銘々治め。内々それ〳〵治め。それから始まった道。急いても出来ん、又しょうまいと思ても出来て来るは、天然の道と言う。よう聞き分け。どれから眺めても成程と言うは天然。これ聞き分け。」（さ33・5・31　松村ノブの五月三日のおさしづに、天然という御言葉を下された処に、如何の処の事でありますや、押して願（尚小人義孝夜分非常に咳きますから併せて願））

計画を立てて、いくらお金を使い、いくら人間の知恵や力を振り絞っても、思惑のように進まない。それは天然でないからだと言われる。反対に、しようと思っていなくても、不思議と成ってくる。それが天然だと言われる。そして、この道は天然で成り立ってきたのだと教えられ、そのことをよく聞き分けて、思案をするようにと諭されている。

こうした諭しから考えると、必ずしも「天然の道」とは言われていなくとも、たとえば、「年限の道」などは同様のことを説かれていることが分かる。

「この道だん〳〵年限の道である。」（さ33・2・17　永尾よしゑ身上願）

「よう〳〵植えただけでは、育つとも育たんとも分からん。そこで、作り上げて余程年限経たにゃならんが道。道が楽しみ。」（さ33・3・11　梶本宗太郎二十一才梅谷四郎兵衛娘とみゑ十四才縁談事情願／手を打ってから、続いての御諭）

「何か悠っくり育てる心、道である。」（さ34・3・7　永尾よしゑ身上のぼせに付願）

人間の力でできることには限りがある。いくら一時にやってしまおうと思っても、できないものはできない。それが天然である。そうした点を聞き分けて、年限かけてじっくりと親神にもたれて歩むように諭されている。

道の上の思案

こうした「道」の諭しを踏まえて、「道の上より見分ける」、「道の上の思案」というような使い方がされている。

「何よ道の上から取って道の上より見分けてやれ。これがこうやこれがどうや、一つ〳〵道理から明らか道諭すのやで。」（さ33・7・15　桝井安松身上咳出る事に付願）

「どんと思案して心治め。道の上の思案治め。道の上の思案とは、どういう事。……成ろと言うて成るものやない。よう聞き分け。身上の処案じてはならん。これでと言うて、折角なあ、こう成ったのになあ、どうでも照る日は照る、曇る日は曇る。この心治めてくれるがよい。」（さ33・8・31　土佐敬誠二十八才身上願）

何事も自分が一生懸命やれば、すぐできるというものではない。天然という視点、言い換えれば、親神に連れて通ってもらうということを忘れずに、一時は苦しくとも、長い目でみて、先を楽しみに歩みを進める思案をするように説かれている。

以上、第５巻の「個人の身上・事情」における「道」の用例を確認してきた。「天然の道」や「年限の道」という言葉を取り上げたが、それは、身上や事情に悩む人々に対して、人間の力に頼るのではなく、親神の守護を頼りとして、先を長く楽しみに、歩みを進めるようにという激励の言葉として理解することができる。